

晩 課

「主や爾によぶ」の
生神女讃詞

第 2 調

生神女ドグマティク

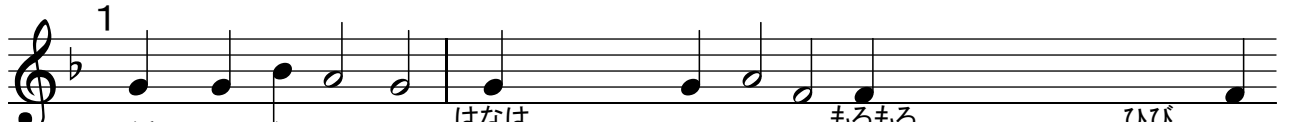
2 調

月曜日

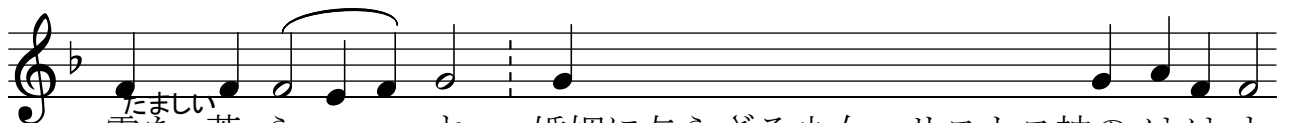
ザピエフ



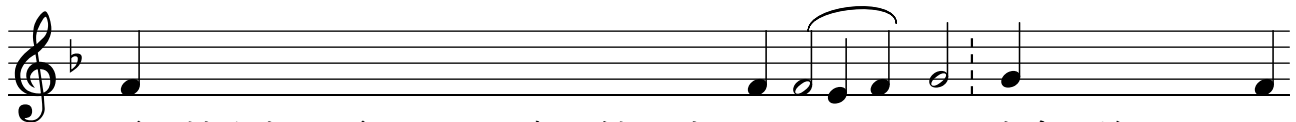
光 栄は父と子と聖神に帰す、今も いっつも 世 世 - に アミン



種々の う れ い はなは 甚だしきいざ ない もろもろ 諸々の欲は我が卑微なる



たましい 霊を 荒 ら - - す 婚姻に与らざる少女ハリストス神のははよ



爾の神聖なる覆いの下に走り付く我のため - - に 生命の海において



導く者となりて 我をみだす嵐を し ず - - め



痛悔と安息との穏やかなる みなと 湊に 向かわしめ た ま - え

生神女ドグマティク

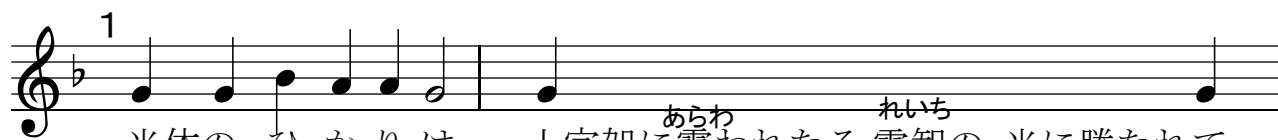
2 調

火曜日

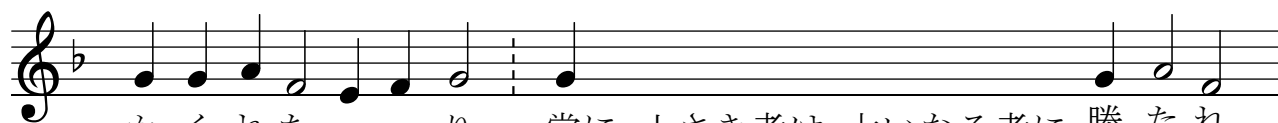
ザピエフ



光 栄は父と子と聖神に帰す、今も いっしょに 世 世 - に アミン



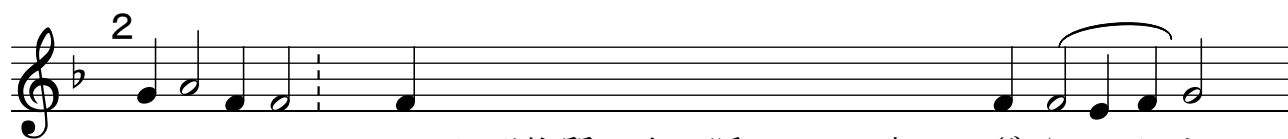
光体の ひかりは 十字架にあらわ 霊智の れいち 光に勝たれて



かくれた - - り 常に 小さき者は 大いなる者に 勝 たれ



善き者は さらに善き者に 位をゆず - る ハリストス の



ひかるに いかなぞ物質の光は隠るるに 宜しかざ ら - んと



至浄なる者は 爾 光の光を 見 て 聞くに勝る者に いえ - - り

生神女ドグマティク

2 調

水曜日

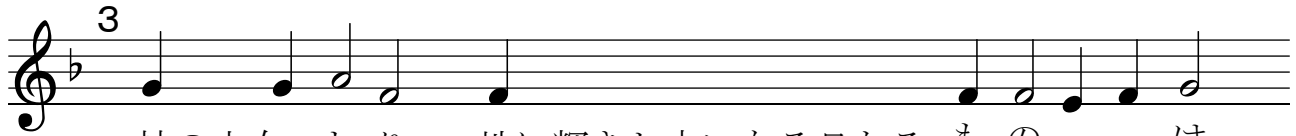
ザピエフ



光 栄は父と子と聖神に帰す、今も いっしょに 世 世 - に アミン



父及び聖神と 同尊なる ことば 末の時に 童 貞 女



神の少女 より 地に輝きし大いなる日たる もの - - は

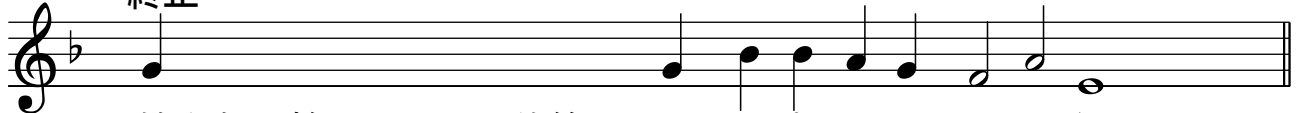


爾等を 光栄なる使徒等 其の光線としてつかわして



正教の光を以て 迷いの黒暗にある 衆人を照 ら - - し

終止



神聖なる教訓を以て 彼等を之に みちびき たも う。

生神女ドグマティク

2 調

木曜日

ザピエフ



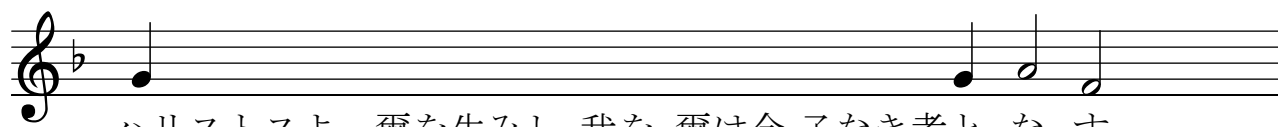
光 栄は父と子と聖神に帰す、今も いっも 世 世 - に アミン



無てんなる牝ひつじは その羔の甘んじて人の ご とく



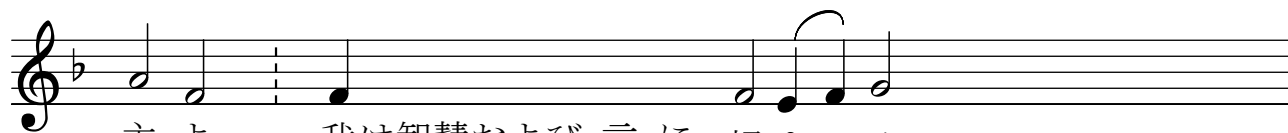
屠りのために牽かるるを見て 泣きて 言 え - - り



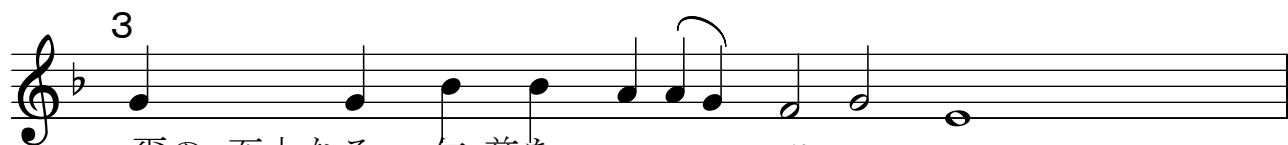
ハリストスよ、爾を生みし 我を 爾は今 子なき者と な す



衆人の救主よ、何ぞ かく 為した - - る しかれども人を愛する



主 よ 我は智慧および 言 に 超ゆ - る



爾の 至大なる 仁慈を 歌 頌 讃 栄 す

2調 金曜日の「主や爾に籲ぶ」のスティヒラ

(句) 我^わが^{たましい} 靈^{ひと}を^{ひき} 獄^{いだ}より曳出して、我^{われ}に^{なんじ} 爾^なの名^{さんよう}を^{たま} 讃揚せしめ給へ、スティヒラ⑩

＜三歌斎経のスティヒラ＞

(句) 爾^{なんじおん} 恩^{われ}を^{たま} 我^{とき}に^{ぎじん} 賜^{われ}はん時^{めぐ}、義人^{めぐ}は我^{めぐ}を環らん。⑨

＜上記繰り返す 略＞

(句) 主^{しゅ}や、我^{われ} 深^{ふか}き 處^{ところ}より 爾^{なんじ}に^よ 籲^{しゅ}ぶ。主^わや、我^{こえ}が 聲^きを^{たま} 聴^きき給へ。⑧

＜八調経から致命者讃頌 4 句＞

至^{いた}りて 讃^{さんび}美^{ちめい}たる 致^{なんじら}命^{にくたい}者^{きず}よ、爾^{まか}等^{はげ}は 肉^{くなん}體^{くる}を^く 傷^くつくるに 任^にせ、烈^{れつ}しき 苦^く難^{なん}と 苦^くしき 死^しとを 忍^{しの}びて、窘^{きん}逐^{ちく}者^{しや}を 辱^はかしめ、實^{じつ}に 偶^ぐ像^{ざう}の 尊^{とう}きを 滅^{ほろ}ぼして、ハリストス^{ゆい} 惟^い一^{いち}の 神^{かみ} 及^{およ}び 主^{しゅ} 宰^{さい}を 傳^{つた}へたり。光^{こう}榮^{えい}なる 榮^{えい}冠^{かん}者^{しや}よ、今^{いま} 爾^{なんじら}等^はは 天^{てん}使^しの 品^{ひん}位^いと 偕^{とも}に 彼^{かれ}の 前^{まえ}に 立^たち 給^{たま}ふ。

(句) 願^{ねが}は 爾^{なんじ}の 耳^{みみ}は 我^わが 祈^{いのり}の 聲^{こえ}を^き 聴^き納^いれん。⑦

受^{じゅ}難^{なん}者^{しや}よ、爾^{なんじら}等^はは 地^ち上^{じやう}の 樂^{たのしみ}を 愛^{あい}せずして、天^{てん}上^{じやう}の 福^{ふく}樂^{らく}を 獲^え、諸^{しよ} 天^{てん}使^しの 同^{どう}住^{じゅう}者^{しや}と 爲^なれり。主^{しゅ}よ、彼^{かれ}等^らの 祈^{きとう}に 由^よりて 我^{われ}等^らを 憐^{あわれ}みて 救^{すく}ひ 給^{たま}へ。

(句) 主^{しゅ}や 爾^{なんじ} 若^もし 不^ふ法^{ほう}を 糾^{ただ}さば、主^{しゅ}よ 孰^{しゅ}か 能^{たれ}く 立^よたん。然^{しか}れども 爾^{なんじ}に 赦^{ゆる}し あり、人^{ひと}に 爾^{なんじ}の 前^{まえ}に 敬^{つつし}まん 爲^ななり。⑥

聖^{せい} 致^{ちめい}命^{しや}者^{しや}の 我^{われ}等^らの 爲^{ため}に 祈^{いの}りて ハリ^{うた}ストス^{およそ}を 歌^{まよ}ふに、凡^やの 迷^{ひと}謬^{やから}は 熄^{しん}み、人^{ひと}の 族^{やから}は 信^{しん}を 以^{もつ}て 救^{すく}はる。

(句) 我^{われ} 主^{しゅ}を 望^{のぞ}み、我^わが 靈^{たましい} は 主^{しゅ}を 望^{のぞ}み、我^{われ} 彼^{かれ}の 言^{ことば}を 恃^{たの}む。⑤

致^{ちめい}命^{しや}者^{しや}の 會^{かい}は 窘^{きん}逐^{ちく}者^{しや}に 敵^{てき}して 曰^いへり、我^{われ}等^らは 萬^{ばん}軍^{ぐん}の 王^{おう}の 兵^{へい}士^しなり、爾^{なんじら}等^は 火^ひ 及^{およ}び 種^{しゅ}種^{じゅ}の 苦^{くる}に 我^{われ}等^らを 付^{わた}すとも、聖^{せい} 三^{さん}者^{しや}の 力^{ちから}を 諱^いまざらん。

(句) 我^わが 靈^{たましい} 主^{しゅ}を 待^まつこと、番^{ばん}人^{にん}の 旦^{あさ}を 待^まち、番^{ばん}人^{にん}の 旦^{あさ}を 待^まつより 甚^{はな}し。④

＜月課経のスティヒラ略＞

(句) 願^{ねが}は イズ^{しゅ}ライ^{たの}リは 主^{しゅ}を 恃^{たの}まん、蓋^{けだ} 憐^{あわれ}みは 主^{しゅ}に あり、大^おなる 贖^{おおい}も 彼^{あがない}に あり、彼^{かれ}は イズ^{その}ライ^{ことごとく}リを 其^ふ 悉^{ほう}の 不^{あが}法^なより 贖^{あが}はん。③

＜月課経のスティヒラ略＞

(句) 萬^{ばん}民^{みん}や、主^{しゅ}を 讃^{ほめ}揚^あげよ、萬^{ばん}族^{ぞく}や、彼^{かれ}を 崇^{あが}讃^めよ。②

＜月課経のスティヒラ略＞

(句) 蓋^{けだ} 彼^{かれ}が 我^{われ}等^らに 施^{ほどこ}す 憐^{あわれ}みは 大^おなり、主^{しゅ}の 眞^{しん}實^{じつ}は 永^{なが}く 存^{そん}す。①

＜月課経のスティヒラ略＞

光^{こう}榮^{えい}は 父^ふと 子^こと 聖^{せい} 神^{しん}に 帰^{かへ}す、今^{いま}も 何^{なん}時^じも 世^よ々^よに ア^あミ^{みん}ン

＜生神女讃詞＞

恩^{おん} 寵^{ちゆう} 来^{らい}たりて…

光栄は父と子と聖神にきす今もいつも世世にアミン

恩寵オンチヨウきたりて法律ホウリツのかげはされりもゆるいはらの焼ヤけ

ざりしごとく童貞女ドウテイジョは生ナみし後ノチも永ナガく童貞女

なり炎ホノの柱ハシラのかわりに真マコトの日は出デでてひか

モイセイのかわりにわがたましいの救者キユウシャ父トス

はあらわれたり

「主や爾によぶ」 第2調 日曜日

痛悔のスティヒラ

(句) 我が靈を^{ひとや}獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、
ハリストス^{きゆうせいしゅ}救世主よ我放蕩^{われ ほうとう}の子の如く^こ爾^{ごと}の前に罪を獲たり、父よ我痛悔^{なんじ}する者^{まえ}を納れよ、神よ、我を憐^{つみ}み給へ。^え

(句) 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。
ハリストス^{きゆうせいしゅ}救世主よ、我税吏^{われ ぜいり}の聲を以て爾に呼ぶ、神よ、我を彼の如く潔めて、
我を憐^{われ}み給へ。^{あわれ}

(句) 主よ、我深き^{ところ}處より爾によぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。
仁慈の主よ、我は行ひし不當なる我が行爲を思ひて、税吏と、泣きたる淫婦と、
放蕩の子に效ひて、爾の慈憐に趨り付き、爾に俯伏して祈る、神よ、我を定罪せざる先に我を宥めて、憐み給へ。

(句) 願くは爾の耳は我が^い祈の聲を聴き納れん。
童貞女より生れし主よ、我が不法を顧みずして、我が心を潔めて、之を爾の
聖神の殿と爲し給へ。無量なる大仁慈を有つ主よ、我を爾の顔より退くる勿れ。

<以下月課經のスティヒラ略>

2調

光栄は父と子と聖神に帰す 今も いつも 世世に アミン

至浄なるものよ、爾の子の無数の天使は

三聖の声を以て 爾を彼の火のさまの 宝座

活ける宮、常に地より彼に渡す 神聖なる橋と うたいて

天使首ガウリイルと同心に、爾^{よろこび}歎喜の泉を 生みし者に

呼ぶ 恩寵^{こうむ}を蒙れるもの よろこべよ